Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

幼児の手指の動作の発達 ―書字動作を中心として―

○ 野中壽子
（いわき短期大学）

―目的―

最近の子どもは、はしやナイフを上手に使えず不器用になった。とよく言われるが、生活用具であってもそれを使う機会が少なければ、当然その動作の習得は遅くなると考えられる。一方、"書く"という動作に関していえば、幼稚園ですでに文字指導を行なっている所があるなど、学習が開始される時期が早くなっているといえよう。書字動作については、これまでにも発達的、教育的見地からいくつかの報告がなされているが、本研究では、通常小学校3年生から始められる毛筆による習字指導を行なっている幼稚園の園児を対象に 書字動作の発達について調べることを目的とした。その他、園児達の手指の全般的な発達をみる為に鉛筆書き、はさみで切る動作についても調査した。

―方法―

対象：毎週1回、40分程度の習字教室を行なっている幼稚園の年長児28名（男児13名，女児15名）

手順：　習字

「こま」という課題を、通常指導が行なわれている通りに、1回めは手本を下に敷いてなぞり、2回め以降は手本を横に置いて見ながら書く。調査は、この2回め以降を対象とした。

鉛筆書き

Ａ４サイズの上質紙に自分の姓名を書く。（平仮名）

はさみ

Ａ４サイズの上質紙に描かれてある直径約10cmの円を切り抜く。

以上3つの動作について、ＶＴＲ撮影、写真撮影を行ない、それをもとに動作様式の分析を行なった。尚、はさみの動作については、ＶＴＲ画面上にタイマーでタイムを入れ、所要時間の算出を行なった。

―結果と考察

毛筆習字の指導は、鉛筆での文字指導より約半ヶ月遅れて年長児の5月から開始され、調査時の1月までに「つり」「くも」「しろ」「ほし」「かき」「ふゆ」の6課題が学習済みであった。筆の持ち方は、中指が筆にかかる2本がけが指導され、毎回文字を書く前に、筆を正しく持ち真っすぐに立て、筆先を浮かせながら書く、等の基本的な扱い方の指導が繰り返し行なわれているようであった。

（表－1）筆と鉛筆の持ち方

	筆			鉛筆	
持ち方	4本	3本	鉛筆	3本	4本
男児	5	5	3	9	4
女児	8	4	3	14	4
計	13	9	6	20	8

筆の持ち方は(表－1)にあるように母指、示指、中指を筆にかけ薬指を添えて支える4本握りができているのは13名、全体の46％で、できていない3本握りは15名、54％、このうち、指関節が鉛筆を持つ時の様に屈曲した、鉛筆握りが6名いた。また、指導の通り筆を垂直近くまで立てて筆先を浮かせながら書いている例はほとんどなく、大部分は筆が横や手前に倒れていた。特に横の線を書く時、右側方に筆が大きく傾き、筆先を引きずる様にして書いている例が多かったが、これは筆先をコントロールして書いているとはいえない。（図－1）

（図－1）

筆先がベタッと着いてしまわないよう肘を高い位置でkeepし、腕全体を自由に動かして書いている割合は少ない。（6名、21％）この場合は手首から先は大きくは動かないが、主に手首から先の操作で筆先の方向を調整して書いている例は多く、これは筆の角度が変わりやすい書き方であると言える。「ま」の「よ」の部分は特に筆先が自由に動かないと書きにくい画であるが、（図－2）のように、左手で補助したり、筆先をこねるようにして回す動作が見られた。筆先が自由に動かせるようにHoldし、腕全体を使って書くことは、この時期では難しいことであると思われ、その分、手先で筆を操作することで補なっていると考えられる。

NII-Electronic Library Service

（図－２）筆先の操作について

◦左は、「よ」のカーブのところで、左手の補助があった。

◦右は、筆をクルクル回しながら こねるように操作していた。

鉛筆書きでは、鉛筆の持ち方が４本の指を使う筆持ち型が８名（29％）いたが、あとは母指、示指、中指の３本で持つ型ができていた。小指は普通軽く紙の上に軽く置かれるが、ここでは鉛筆が右側方に傾く角度がやや大きく、支持面となっている小指側に比較的強い力が加わっている例がみられた。（10名、36％）
これは鉛筆書きの成熟した動作と比べて、支持面の位置が滑らかに移動せず、手首から先にも力が入っている為、３本の指の巧みな協応動作とは認めにくい。このような動作は、男児で６名（46％）、女児で４名（27％）と、男児においてやや多くみられ、毛筆の時にはほとんどみられなかった男女の差が現われた。

はさみで切る動作についても、男児と女児では差が現われた。直径約10cmの同じ大きさの円を切り抜くのにかかった時間は、男児の平均が１分42秒、女児が１分01秒と、女児の方が短かく、有意な差がみられた。（$P<0.01$）これは、これまでの研究の女子の方がはさみを上手に使えるようになる時期が早い、という結果と一致しているが、ここでの速度の差には、単に右手のはさみの操作の巧拙だけでなく、左手の使い方にも大きく影響されている。左手には、紙を支える、紙の方向を変える、などの機能があるが、（表－２）にあるように紙を左手で持つことによってこの役目を果たしているのはⓐ－男児４名（27％）、女児９名（60％）であった。置いたままで切るのは、左手で紙が動かないように空中で一定の位置に保つのが困難であったり、左手と右手の協応が不完全の為にはさみの進む方向に応じて紙を動かすことができなかったりするからだと思われる。

（表－２）はさみの使い方

	所要時間	左手の使い方 ⓐ	ⓑ	ⓒ
男児	１分42秒	4	5	4
女児	１分01秒	9	5	1
計	１分20秒	13	10	5

ⓐ＝左手で紙を持って
ⓑ＝持つ＋置いて
ⓒ＝机の上に置いたまま

３種の動作の関連をみてみると、はさみの動作の所要時間が少なかった女児で、鉛筆の持ち方や書き方についても、上位の段階にあった者がいたが、毛筆にはそれがあてはまらなかった。このことから考えると、筆での書字動作の学習の機会は、週１度の習字教室にほぼ限られているのに対し、鉛筆書きや、はさみを扱うことについては、一斉指導の他にも遊びの中などで行なう機会も多く、女児はより多く体験していた、と推察される。
毛筆による書字動作は単なる手先の巧みさだけでなく、上体を正中位に保って、腕を自在に動かすことができる姿勢で書く、速度もコントロールしながら比較的ゆっくり書く、など、鉛筆での書字動作とは異なった性質のものであり、幼児期にはかなり難しい動作であると考えられる。しかし、鉛筆書きの時の姿勢は、大部分が机におおいかぶさるように書いていたり、正中位がくずれている例が多かったのに比べると、毛筆書きの方が良い姿勢であって、幼児なりに合理的な動作様式を体得していくものなのであろう。

NII-Electronic Library Service